支援教育は“ポジティブ・アクティブ・インクルーシブ”

能勢町立岐尼小学校　横山孝雄

１．はじめに

様々な児童の実態、課題に対応しながら、とりくみを進める支援教育において、大切にすべき視点・観点について、本校の近年の取組の中で得られた成果をもとに、今後のさらなる支援教育の充実に向けて提案したい。

２．教職員の児童理解の取組

（１）「個別支援連絡会（支援教育連絡会）」

年間８回程度の設定で、主に大きな行事の前に支援学級在籍児童の課題や目標を明確にした上で検討し、職員会議を通じて全教職員での情報の共有を図っている。参加者の構成は、管理職・養護教諭・支援学級担任・介助員で、必要に応じて通常の学級担任も参加している。また、資料には個別の教育支援計画の短期目標も併記し、現状の取組の進捗についても確認している。

（２）「児童メモ」

各教職員で記録している児童の様子について、共通の様式（紙媒体の配布及び校内ＬＡＮ内の電子媒体）で情報の集約、共有化を図っている。全校児童を対象にしており、学期ごとに行っている学級実践交流の際に各学年ごとにまとめて報告している。

（３）「職朝交流」

毎週月曜日と木曜日に行っている職員朝会の次第の最後に、その週の週番に当たっている教職員（２名のペア）から、主に担任している児童のようすについて報告し、課題や目標の共有化を図っている。

３．児童同士の理解の取組

（１）「人権朝会」

毎年度、１学期に障がい児理解をテーマにした人権朝会を行っている。支援学級在籍児童について、支援学級担任やクラスメイトから児童の普段のようすやがんばりを伝えたり、保護者の思いを手紙や全校児童の前で語ってもらったりする取組を行なっている。学校生活での事故を未然

に防ぐことや、無理解からの偏見をなくし、仲間づくりにつなげることをねらいとしている。

（２）「れっつコラボ」

2011 年度より、１・４年生、２・５年生、３・６年生をペア学年で固定化し、集団遊びだけでなく、学習面での交流の取組（辞書引きの練習、算数の学習内容の振り返りなど）も広げている。上級学年は自尊心や自己肯定感が向上し、下級学年は学習意欲や学習規律の向上などの効果が見受けられる。

（３）「縦割り活動」

全校児童の縦割り班でのそうじや、登校班での校内の植栽の整備など、異年齢集団での取組を行っている。さまざまな活動を通して、普段気づくことのなかった姿に触れたり、一緒に一つのことを達成することによって、お互いの理解を深めるがことできる。

以上のような取組を通して、支援学級の在籍の有無に関わらず総合的な児童理解の取組を推進している。次項からは、支援学級在籍児童の具体的な事例を紹介する。

４．Aについて

（１）2011 年度能勢町夏期研レポートから

Ａ（2012 年度卒業）の電動車いすの活用を通じたクラスメイトとの交流、本人の学習・生活意欲の向上の取組（４学年～５学年１学期）について、2011 年度に能勢町人研・町研・町外教の夏期研において報告した。高学年以降も、さまざまな行事でクラスメイトと力を合わせ、時にはサポートしてもらい、達成感を味わいながら、いよいよ卒業後の進路に向けた動きとなった。

（２）卒業に向けた進路選択

保護者の思いとしては、地域の中学校と複数の支援学校の見学を通じて、本人にとってよりよい環境を望むところや毎日の通学が長距離であること、定期的な検診の負担などについて考慮しての決定となった。Ａの思いとしては、本音のところをはっきりと聞くことができないままであった。保育所から一緒に学校生活を送ったクラスメイトとのつながりもあるが、やはり保護者とのやりとりの中でその思いを酌むところが大きかったと推察している。

（３）入学式に参列して

本年４月、Ａの支援学校での入学式に参列する機会を得ることができた。外部からの入学者はＡのみであったが、温かな雰囲気の式を終えた後の保護者の表情からは、安堵の思いが見てとれ

た。Ａ自身は入学と同時に入院生活が始まり、病棟から校舎がつながっていて、すぐに通学となる環境にまだ慣れていないようすで緊張した表情であったが、新しい生活を前向きに進もうとしていた。４～６年生の３年間、Ａの支援学級担任として関わった総括の瞬間として感慨を覚えるのと同時に、改めて支援学級担任の責任の重さを認識したできごとであった。

５．Ｂについて

（１）入学時の対応について

双子の姉妹で、２人とも軽度の難聴（入学後にほぼ完治）のＢらは就学前に見学した際のようすでは一斉指導に溶け込んでおり、また入学後もクラスメイトとの活発なかかわりのかいもあり、当面は入り込むことにした。

（２）本当に必要な支援とは？

基礎的な内容の反復を中心としながらも、学年の内容に沿って学習を進める中、Ｂらが体の不調を訴えて学習を避けようとする行動が目立ち始めた。当時の支援学級担任と検討を重ねる中で、２年生の３学期から一旦、抽出授業で本人らの現状の学習理解に合った内容での取組に切り替えることにした。

（３）今年度の取組

今年度よりＢらの支援学級担任となり、１学期は引き続いて抽出授業での対応とした。しかしながら、クラスメイトとの強い信頼関係を活かす方法はないかと再検討する中、学年の人数が１０名で通常の学級の教室のスペースが広いという利点もあり、２学期以降は学年の教室内で本人らにあった学習内容に取り組むこととした。単元によっては、全面的に入り込み、臨機応変に対応する体制とした。クラスメイトと同じ学習内容で、指名されて答え認められることの充実感は、何よりもＢらの晴れ晴れとした表情が物語るものである。今後も、クラスメイトとのつながりを活かす取組を、さらに高めていくことが大切との認識である。

６．Ｃについて

（１）入学に向けた準備

生後の心臓疾患と家族からの生体肝移植で運動制限のあるＣについては、入学前から行政と連携を密にし、通っていた保育所への参観、職員からの聞取りなど情報交流に努めた。また、保護者にも何度も学校へ足を運んでもらい、Ｃの入学に向けての体制を整えた。

一番の懸案事項は、看護師資格のある介助員の人員確保で、能勢町の公共交通機関が少ない地理的な問題を抱え、まだ学校生活の過ごし方に見通しの持ちにくいＣの担当に当たってもらうこ

とは、制約が大きいように思われた。しかしながら行政の尽力もあり、入学式までに複数の看護師の方の確保が実現し、学校現場としても安心してＣを迎え入れることができた。

（２）教職員間の連携について

１年生学級担任、支援学級担任、介助員、看護師、学年団の教員と、Ｃにかかわる教職員は多岐にわたり、情報の共有をどのように行うかが課題であった。まずは何よりもＣの体調管理を優先することを確認し、学校生活に慣れるまでは、看護師にこまめに体調の確認をしてもらい、その上でどのように過ごすかを判断した。また、全校児童にＣの身体への配慮を伝えるため、５月上旬に人権朝会を行った。学校生活で気をつけてほしいことや保護者の願いを支援学級担任から伝え、各児童も見た目からはわからないＣの大変さを感じることができた。

（３）今後の課題

学習が進むにつれて、当初は把握できなかった認知面での課題などが表出してきた。今後は、体調面に配慮しながらも、習得すべき学習内容を見極め、どのような指導形態、指導方法で取り組むべきかを検討していくことが必要である。

７．一人ひとりを見つめながら～支援教育のポイント

現任校での３つの事例を取り上げた。このような、それぞれの児童との関わりを通して得られた、支援教育に携わる中で大切にしたい視点・観点を以下にまとめる。

（１）「ポジティブ」～可能性を信じる前向きさを

どの児童にも「今、できること」があり、「これから身につけさせたいこと」がある。まずは何がどこまでできるのかを探り、その積み重ねから出発したい。そのことが本人の学校生活の充実、学習意欲の向上につながると考える。そのためには、児童の実態や課題の的確な把握が必要である。それには、支援学級担任一人だけに頼ることなく、児童にかかわる教職員全員が情報を共有しながら、指導に活かすことのできる具体的、継続的な方策が求められる。また、教職員全員が、どこまでも児童の成長、変容の可能性を信じ、決してあきらめないことが何より重要だと確認しておきたい。

（２）「アクティブ」～臨機応変かつ大胆な対応を

私たちは、日々刻々と変化する児童の姿に直面し、その無限の可能性に感動を覚えるとともに、児童がなかなか克服できない課題にぶつかることに、出口の見えない辛さをともに味わうことも少なくない。常によりよい指導方法、学習教材、関わり方などに、広く、鋭くアンテナを張りめぐらしながら、必要に応じた指導体制の調整・変更と、課題に応じた指導方法の改善に大胆に取

り組んでいきたい。マンネリ化した指導法で漫然とした姿勢で取り組み、思うような結果を生み出せずに終える、ということは絶対に避けなければならない。

（3）「インクルーシブ」～違いを越える力を

児童一人ひとりの課題に対峙したとき、その学びはどうしても個別的になり、分散化する傾向がある。個人の課題の克服を優先にした場合、その傾向はより一層強まっていく。しかし、“ともに学び、ともに育つ”という観点に立ったとき、個人の課題は、個人に関わるすべての人間関係の作用によって、集団共通の意識として昇華されることで、マイナス面が解消され、その克服が達成されると考える。

集団のもつ力を最大限活用していくためには、普段からの集団づくりが土台になるのは言うまでもない。そしてそれは、とりもなおさず児童とかかわる教職員同士の円滑な関係づくりにも関わってくる。本校では、支援学級担任も、週何時間かの通常学級の授業を主となって担当することになっている。授業者としての視点を常にもつことで、一方だけの立場に留まることなく、児童を多角的に捉え、柔軟な姿勢を保つことができると思われる。このような、いわば教職員にとっての“インクルーシブ”も大切だと考える。

８．成果と考察

今回、現任校でのとりくみを振り返る機会を得て、さまざまな課題にぶつかるたびに、解決・改善のために教職員で検討を重ね、意見を交流しながら進めてきたことを改めて感じた。その中で、今回提案した３つの視点が次第に明らかになってきた。今後は、異動によって教職員の入れ替わりがあっても、支援教育のとりくみの基本的な指針として、永続的に共有していけるように図っていきたい。

９．おわりに

誰かが困っているときに、寄り添い、いっしょに解決の道筋を歩む。目標として掲げるのは容易く、実際に行い、周りに広げていくのはとても難しいことである。学齢期にさまざまな出会いを通じて、様々な状況にある仲間とかか
わり成長することが、将来、社会を担う一員として歩んでいくとき、あらゆる違いの壁を越えた共生の社会の実現への力を発揮する土台になるものと信じてやまない。